崎元脩のシュルツェ（B. S. Schultze）の原書訳の『朱氏産婆論』あたりからのように思われる。

ハンガリーの医学史研究は József Antall 教授から Maria Vida 教授へと変っている。

ハンガリー医学史の二、三の参考書を紹介した。

ゼンメルワイス像の記念切手も一九三二年、一九五四年、一九六〇年三月八日国際婦人デー（母親たちの救いの手）、一九六五年の没後百年記念の他に、一九八七年のヒポクラテス、アビシンナ、ハーベー、パレとともに五人の医学功績者の一連の記念切手が出されている。

（平成六年一一月例会）

A. Vesalius: *Epitome* のラテン語原典および独・蘭・仏・英語版の特色（一）

近藤　均

（1）研究発表までの経緯

人体解剖学の基礎を据えたヴェサリウス（慣用にしたがってこう表記する）の著作の書誌学的研究は、前世紀末の M. Roth による伝記の刊行によって先鞭がつけられた。そして今世紀中葉に H. Cushing が原典や各国語訳の現存状況を調査し詳細な関連文献リストを作成したことによって、本格的研究が可能となった。主著である通称『ファブリカ』はよく知られ、日本国内にも原本が少なくないが、そのダイジェスト版で初学者向けに編まれた通称『エピトメー』のほうは、数ヶ国語に訳されて『ファブリカ』よりも影響が多大であったにもかかわらず、国内外を問わず本格的研究はほとんどない。『エピトメー』研究には、①一五四三年刊のラテン語原典はもちろん、②同年刊の独語版、③一五六九年刊の蘭語版、④同年刊の仏語版、⑤一九四九年刊の英語版の参照が必須である。しかし、①～④の現物は『ファブリカ』より遙かに貴重で、世界中の公的機関を合わせても各々せいぜい二〇冊ずつしか現存せず、日本国内には皆無と推定される。筆者は②③④のマイクロフィルムを、②はハーバード大学図書館、③はベルギー王立図書館、④はニューヨーク医学アカデミーから入手した。①については、⑤の巻末収載の縮小ファクシミリを参照したが、一部不鮮明な個所は、カンザス大学メディカルセンターから提供されたフォトコピーも参照した。本研究発表は、以上の入手資料から確認し得た①～⑤の特色を、スライド供覧のうえ二回にわけて報告するものである。

（2）ラテン語原典の特色

『ファブリカ』初版とほぼ同時期に同じくバーゼルで刊行され、判型は『ファブリカ』の四三×二九糎ほどに対し、それよりかなり大きく五五×四〇糎ほどである。本文・付図・付図解説など紙葉一四枚からなり、販売時には無綴で表紙もなかった。『ファブリカ』初版と共通な扉絵に始まる一二枚二三頁分（一二枚目は片面印刷）については、各自で綴じる旨の指示がある。他の二枚（片面印刷）は付録の剪型解剖図集（後述）

である。扉絵につづく献辞は、『ファブリカ』が神聖ローマ帝国皇帝カロルス（カール）五世宛てなのに対し、『エピトメー』は、皇太子フィリップス（後のスペイン国王フェリペ二世）宛てである。

本文は、左右二列、原則として各七五行に組まれ、左右の欄外には、ガレノスの著作から引用された延べ四〇〇語ほどのギリシャ語解剖用語が列挙され、本文のラテン語とほぼ一対一に対応している。『ファブリカ』が、(1)骨格系、(2)筋系、(3)脈管系、(4)神経系、(5)消化器官と生殖器官、(6)胸部器官、(7)脳という章立てで、全身から局部へというように解剖学の体系性を意識した構成になっているのに対し、『エピトメー』の構成は、(1)骨格系、(2)筋系、(3)消化器官、(4)胸部器官と脈管系、(5)脳と神経系、(6)生殖器官というように、(3)以下は、教育的配慮により、初学者が解剖して確認し易い順序にほぼ並べられている。

付図には、全身を描いたものとして、ⓐ骨格系一種、ⓑ筋系五種、ⓒ神経系一種、ⓓ男女の裸形図各一種、ⓔ剪型解剖図集の台紙（脈管系）二枚がある。このうちⓐⓒとⓔ一枚は『ファブリカ』と共通である。説明文は記号によって図と対応している。剪型解剖図集は、局部を描いた大小さまざまな図を指示に従って切り抜いて台紙ⓔに張り付け、最終的にⓒと重ね合せれば、人体構造をある程度は立体的に把握できるしくみになっている。稚拙ではあるが教育上の画期的な工夫である。なお、『ファブリカ』『エピトメー』ともに、付図の原画を描いたのはVecellio Tiziano の弟子 Johannes Stephanus といわれているが、確かな証拠はない。

（3）独語版の特色

原典と同じ版型で、ほぼ同時期に同じくバーゼルで刊行され、紙葉一九枚からなり、やはり、元来は無綴・無表紙であった。剪型解剖図集二枚を除く一七枚三三頁分が本体である。皇太子への献辞の次には、バーゼルを含む地域の統轄者ヴュルテンベルク公への訳者献辞が追加されている。

本文は原則として左右各九二行で、欄外には、原典から引用されたラテン語が延べ二三〇余語示されている。文章は直訳ではなく意訳（パラフレーズ）調で、語数が原典の約二倍にも及んでいる。これは、当時まだ独語では解剖用語が未成熟であったためと、予備知識に乏しい理髪外科医などにもわかり易い説明をするという配慮によるものである。

原典の付図は同一の版木によってすべて印刷収録され、さらに、原典にない図七種が『ファブリカ』初版から選んで追加されている。これも読者に理解し易くするための配慮である。追加された図は、V 11（腸間膜）、V 24（女性の腹腔）、V 25（女性の乳腺や腹腔）、V 26（子宮・卵巣・膀胱など）、V 27（膣・子宮など）、V 30（子宮・胎児皮膜・胎児など）、VI 7（心臓断面）である。こういう配慮もあって本書は、人体解剖学の独語圏への拡大・普及に多大の貢献をした。

訳者 Albanus Torinus は、当時バーゼル大学総長であった。海賊版の横行を懸念していたヴェサリウスが同大学に客

員として滞在していた間に、彼の翻訳に協力したらしい。表題は Von des menschen cörpers anatomey, ein kurzer, aber vast nützer ausszug…である。ちなみに独語版の先行研究としては H. E. Sigerist の論文（一九四三年）がほとんど唯一のものである。

次の機会には③④⑤の特色についてスライド供覧のうえ概説し、さらに、ヴェサリウスの著作全体の書誌学的研究の現状と課題についても付言したい。

（平成六年十一月例会）

ヴィデオ供覧「呉家の人びと（野間祐輔先生出演）」

岡田靖雄

これは一九九四年七月三日に広島テレビで放映されたもので、呉市提供による「ズームアップ呉」の「呉ゆかりの人物」第二回である。呉市史編さん室の千田武志氏が呉市長ノ木町の呉氏旧居跡に案内したのちに、呉市中央公園にある呉文聰顕彰碑をまえに野間祐輔先生が「呉家の人びと」についてかたられる。

野間先生は広島県で呉秀三先生顕彰の中心になっておられる方で、呉茂一先生を何回か広島県内や瀬戸内の島に案内された。広島市での日本医史学会総会の副会長をされ、わたしの報告のときは司会をしてくださった。またこのヴィデオをおくってくださったのは、同総会のとき事務局としてご尽力くださった広島県医師会事務局の菅田友樹氏である。

野間先生は統計学の文聰先生、精神病学・医史学の秀三先生（その弟）、西洋古典文学の茂一先生（秀三先生の息）、経営学の文炳先生（文聰先生の息）、内科学の建先生（文聰先生の息）について手みじかにかたられた（電話でうかがうと、「しゃべったことの一〇分の一にされちゃったんですよ」と野間先生はいわれたが、三分ほどに要領よくまとめておられた）。

ところで、供覧当日は時間の余裕がすこしあった。そこで、ヴィデオの最後に箕作阮甫五〇年祭にあつまった一族の写真がでていたので、野間先生にならって岡田が「箕作家の人びと」につきかたった。

箕作阮甫にセキ、つね、しんの三女があり、それぞれを優秀な門下生にとつがせ、孫や曽孫の女もまた優秀な学者にとついでいるので、巨大な箕作山塊ができあがった（文聰、秀三はセキの子である）。阮甫の孫新六には、穂積八束の娘がとついでいる。穂積一族にも優秀人、著名人が集積している。穂積一族の中核は法学者であるが、その先は実業家、政治家、軍人、学者につながっている。対照的に箕作一族はほとんどが学者でしめられている。

戦前の教科書には箕作一族を学者の遺伝の例としてあげているものがあったときく。洋学弾圧期に箕作一族は、蘭書をよむ父の声がたかいと娘がたしなめる、というように身をひそめていきた。また維新後、たとえば阮甫の孫で法学者の麟